放眼日中

単純労働者の受け入れは…

先日シンガポールを訪れたが、現地のホテル代が高くて困った。シンガポールは、香港と並んで不動産価格が高い。仕方なくチャイナタウンの狭い安宿に泊まった。チャイナタウンは今や完全なテーマパークとなり、レストランの客引きも激しいが、その中国語（標準語）の発音が非常に良い。彼らに聞いてみると、皆中国大陸から来ているとのこと。「シンガポール人はこのような仕事は絶対にしない」ということで、出稼ぎ労働者が担っていた。彼らはどうやって入って来るのだろうか。

ホテルでも一つ面白いことがあった。毎朝掃除のおばさんが大きな声で「おはようございます」と挨拶してくれた。その日本語の発音があまりに良いので、日本語で話し掛けてみると、何と流暢に話すので驚いた。このおばさんは東京で17年もの間、働いていたというのだ。新宿のレストランで恐らくは皿を洗ったり、掃除をしたりしていたのだろう。それでも東京は楽しかったという。そんなに長い間日本にいながら何故、今はシンガポールのホテルで掃除しているのか。

親しくなると彼女は話し始めた。「私はマレーシアンチャイニーズ。日本にいる間にビザの規制が厳しくなり、いつしか不法滞在になってしまった。ある日、入管難民法（違反）で捕まり、強制送還となった」。「シンガポールはいいよ、ビザの心配がないから」と笑う彼女。本当に明るくていいおばさんなのだ。

日本には外国人の研修制度というものがあるが、実際には外国人の単純労働者の受け入れ機能を果たしているようだ。以前カンボジアで出会った女性は「日本の香川県に2年、農業研修で行きました」と流暢な日本語で語り始めたが、その2年間で県外に出たことは一度もなく、食事も切り詰めて、讃岐うどんばかり食べていたという。労働はきついが研修なので、手当は安い。それでも「必死に働いてお金を貯めて、帰国後母親に全て渡したらとても喜んでくれた」と話す。日本人としては何と言ってよいか分からなかった。

シンガポールではこういう単純労働者を受け入れている。タイなら、最初は不法に入国しても、きちんと働いて職場の支援が得られればビザ取得の可能性もあると聞く。日本は単純労働者が明らかに不足しているのだから、「法律で縛る」のではなく、現実を直視した方がよい。不法滞在を取り締まることに経費を掛けるのではなく、研修制度などという曖昧な仕組みを本来あるべき姿にするとともに、きちんと必要な外国人の労働者を受け入れていけば、日本はまた違った社会になっていくのではないか。

犯罪が増えるなどの話も聞こえてきそうだが、単純労働者の受け入れがその原因とは限らない。勿論、シンガポールなど外国人の労働者を受け入れている国の制度をきちんと学び、受け入れに障害があるのであれば、その克服に努める必要がある。日本では経済的な理由から外国人観光客の誘致には熱心だが、実は外国人の扱いにはあまり慣れていない、との声も聞かれる。マレーシアのおばさんやカンボジアの女性のような労働をきちんと評価してあげれば、日本のファンは今よりもっと増えるだろう。国民の所得増加が著しいアジアを取り込むには「いいとこ取り」は難しいのではないだろうか。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。